慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慣習性に基づいた英語の句複合語構文
Sub Title	
Author	細谷, 諒太(Hosoya, Ryota)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2021
Jtitle	Colloquia (コロキア). No.42 (2021.) ,p.63- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語学・言語学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20211220-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慣習性に基づいた英語の句複合語構文 *

細谷 諒太

1. はじめに

英語には句複合語 (phrasal compound) と呼ばれる表現が存在する。その厳密な定義については議論の余地があるが、英語の句複合語の特徴については、「右側主要部の複合語で、主要部は名詞であることが多く、非主要部に句が含まれている」という点では、多くの研究者が合意しているようである。ここでいう「句」とは、VP (動詞句)、NP (名詞句)、AP (形容詞句)、AdvP (副詞句)、PP (前置詞句)、または CP (文) のことである。例えば “off-the-wall remarks” (突飛な発言) は 名詞 “remarks” を主要部とする句複合語であり、非主要部 “off-the-wall” は前置詞句を成している。このように、非主要部全体が句を成している場合も、非主要部が句を「含んでいる」と言える。非主要部 “off-the-wall” は決まった言い方であり、英語母語話者のレキシコンに登録されているが、“this-person-is-a-jerk attitude” (「こいつはいやなやつだ」っていう態度) (Bauer et al., 2013, p. 457) のように臨時性の高い非主要部を持つ句複合語もあり、非主要部の慣習性には程度の違いが見られる。句複合語は従来より語形成の分野で理論的な研究がなされてきた。近年ではさらに研究の裾野が広がってはいるが、表現の希少さと検索の難しさのためか、コーパスから用例を多く集めて分析をしている研究は少ない。また、分析の理論的枠組みにも偏りがあり、例えば認知言語学的な観点からの研究はほとんど存在しない。

本論文では、ケーススタディとして、「“approach(es)” を主要部名詞とし、非主要部が慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語」に限定して詳細な分析を行い、その結果を基に、主要部名詞の指定を外したより一般的な「慣習的な形式や背景知識に基づいた英語の句複合語」を、形式と意味・機能の対である構文として定義する。その後、Hilpert (2019) の構文の認定基準に基づいて、この種の句複合語を構文として認定することが妥当であることを主張する。

本論文の構成は以下の通りである。まず、第 2 節では、句複合語研究の現状を、数少ない構文文法の観点からの考察に言及しながら概観する。次に第 3 節で、本研究のデータ源、用例の収集方法、研究の方法について説明を行う。続く第 4 節では、収集した句複合語の形式と意味を、その表現の背後にある慣習的な形式や慣習的な背景知識に言及しながら詳細に分析する。第 5 節では、第 4 節の結果を基に、慣習的な形式や背景知識に基づいた英語の句複合語を、形式と意味・機能の対である構文として定義する。さらに、その種の句複合語を構文として認定することの妥当性を、Hilpert (2019) で紹介されている構文の認定基準に基づいて論ずる。第 6 節は本研究のまとめである。

* 本研究を進めるにあたり様々なアドバイスを賜りました井上逸兵先生 (慶應義塾大学)、小原京子先生 (慶應義塾大学)、大学院の研究会参加者の皆様に感謝申し上げます。

2. 句複合語研究の現在

句複合語については、かねてより、句が複合語の内部に現れているという特殊な形式をどのように説明すればよいかという観点から、語形成の分野を中心に理論的研究が行われてきた (Shimamura, 1986; 島村, 2013; Wiese, 1996)。このような語形成の分野での理論的な句複合語研究は現在まで続いているが、実験や新グライス派の語用論の概念を導入した Meibauer (2007) を機に、語形成以外の分野からも句複合語に対する分析が見られるようになった。現在では、語用論的観点からの分析 (Meibauer, 2015)、コーパスや概念意味論を用いた分析 (Trips, 2012)、引用との関連性についての考察 (Pafel, 2015) など、特にドイツの研究者たちを中心として、研究は広がりを見せている。

様々なアプローチによって広がりを見せている句複合語研究ではあるが、認知言語学的観点からの研究は極端に少ない。認知言語学の一分野である構文文法の研究者 Martin Hilpert は、著書の中で句複合語について触れ、「構文文法の考え方を取り入れれば、句複合語は全体として <名詞 + 名詞> 型の複合語の構造や強勢パターンを継承し、非主要部が一般的な句構造を継承するというような、多重継承の例とみなすことができる」(Hilpert, 2019, p. 80) と指摘している。しかしながら、構文文法の考え方を適用するためには、そもそも句複合語が形式と意味・機能の対である構文として定義されていなくてはならない。ドイツ語の句複合語に関しては、すでに Hein (2017) が構文として定義することを試みているが、英語の句複合語はいまだに構文として定義されておらず、さらなる研究が期待されている。

3. データと方法

130 億語以上を収録する大規模な英語のウェブコーパスである enTenTen15 を、検索ツール Sketch Engine (https://www.sketchengine.eu/ententen-english-corpus/) を通して利用し、句複合語の用例を収集した。このコーパスはウェブページから採集した英語で構成されているため、今回収集した句複合語の用例のほとんどが書き言葉の中で現れたものであると考えられる。Sketch Engine のインターフェースを利用して「4 つ以上のハイフンによって 5 つ以上の語が連結された文字列」の直後に「名詞のタグ付けがなされた approach(es)」が生起している事例を全て収集した。[1]ここから誤ったタグ付けがなされている例を取り除くと、全部で 676 件の用例が残った。このうちはじめの 400 件を一つずつ Google 検索

[1] URL などを含む不適切な事例を排除するために、実際にはもっと複雑な検索をした。正確には、「“A B approach(es)” という形式の 3 つの部分からなる文字列の連鎖で、A の部分は “http”、“www”、スラッシュ、数字、ハイフンの連続、アットマーク、ハイフン 3 回と任意の一文字 2 回が交互に連続した 5 文字の連続、末尾のハイフンのどれも含まれず、B の部分は少なくとも 4 つのハイフンを含む文字列で、“http”、“www”、スラッシュ、数字、ハイフンの連続、アットマーク、ハイフン 3 回と任意の一文字 2 回が交互に連続した 5 文字の連続のどれも含まないようなもの」を検索した。この検索結果が 678 件で、“approach(es)” のタグ付けが誤っていた不適切な例を取り除くと、677 件の適切な用例が得られた。なお、“approach(es)” を主要部名詞とする句複合語を今回の分析対象に選んだのは、このような “A B” の直後に生起する名詞の中で最も用例の件数が多かったためである。また、ハイフンを 4 つ以上と指定したのは、用例の均質化を防ぐことで、より妥当な一般化を目指すためである。例えば B の部分のハイフンの数を 3 つに指定すると 5032 件のヒットがあり、そのうち “one-size-fits-all approach(es)” が 2283 件、“state-of-the-art approach(es)” が 611 件というように、一部の決まった言い方が多数を占めていることが確認された。

にかけ、それらの表現の背後に基となったと考えられる慣習的な表現形式や背景知識が存在しているかどうかを調べた。

上述の通り、今回の調査では分析対象を主要部名詞が “approach(es)” である句複合語に限定し、さらに、慣習的な形式や背景知識に基づいているものに限定した。このような限定を行ったのは、多少なりとも類似した用例を扱うことで、一般化を行いやすくするためである。“approach(es)” を主要部名詞とする句複合語 400 件のうち、今回の分析対象からは外した、慣習的な表現形式や背景知識が基になっているとは考えにくい用例は 202 件 (50.5%) であった。これらには例えば、“make-connections-to-the-real-world approach”、“this-is-the-way-we-did-it-last-year approach”、“non-recognition-of-ethnic-groups approach” などの例があり、これらの意味・機能について何らかの特徴に基づいた有意義な一般化を行うことは容易ではない。それに対して、今回分析対象とした、慣習的な表現形式や背景知識が基になっていると考えられる用例については、慣習性に基づいているという点で共通しており、その特徴に着目した意味・機能面での一般化が可能である。このように、対象を限定することで一般化が行いやすくなり、対象を限定した一般化を積み重ねていくことで、次第により高い抽象度での一般化をボトムアップに行っていくことが可能となる。本研究はそのための一つのケーススタディとして位置づけられる。

4. 分析

今回調査した 400 件の用例のうち、背後に基になっている慣習的な表現形式や背景知識が存在していると考えられるものは 198 件 (49.5%) であった。[2]この中には、慣習的な表現形式がそのまま使われているタイプの句複合語、慣習的な表現形式の一部が改変されているタイプの句複合語、慣習的な背景知識が基になっているタイプの句複合語の 3 つの種類が確認された。ここではこれらの 3 つのタイプの用例を順に検討していく。

4.1 慣習的形式のそのままの使用

慣習的な表現形式や背景知識が基になっていると考えられる句複合語の中には、慣習的な表現形式がそのまま使われているタイプが確認された。具体例は以下の通りである。[3]

(1) a **my-way-or-the-highway** approach
a **take-it-or-leave-it** approach
(2) Unfortunately, rather than acting as good stewards to our earth and health, the power industry has taken an **out-of-sight-out-of-mind** approach to the voluminous waste from the coal combustion process.

[2] 意味が構成的であるなどの理由で慣習性の判断が難しい例については、Google の完全一致検索で 1000 万件以上ヒットするものを慣習的であるとした。

[3] 本論文中の出典が示されていない例文は全て enTenTen15 から収集したものである。また、例文中の強調は全て筆者による。

(3) As a Chicago newsman for more than two decades, I became steeped in the **if-your-mother-says-she-loves-you-check-it-out** approach to journalism.

上の (1) から (3) は、慣習的な表現形式が改変なしにそのまま使用されている例である。(1) の “my way or the highway” は、「立ち去らないのであれば，ある人の意見や方針を受け入れるしか道は無い」という状況において、その「ある人（の意見や方針）」の独断性を表すのに使用される表現である。[4]“take it or leave it” は取引に関する文脈でよく使用される表現で、「それ以上交渉の余地は無く、受け入れるも拒否するも好きにせよ」といった意味をもつ。[5](2)では “out of sight, out of mind”「いなくなった人のことはすぐに忘れてしまうものだ」ということわざがそのままの形式で使用されている。[6]しかし、この例文では、文脈上、人々の視界から姿を消すのは人ではなく廃棄物であり、“an out-of-sight-out-of-mind approach” は「廃棄物を人々の目から隠すことによって、その存在を忘れさせてしまおうとするやり方」を意味している。(3) の “If your mother says she loves you, check it out.” はシカゴの新聞社から広まったジャーナリズムにおける格言で、「情報の信憑性には常に目を光らせていなければならない」というジャーナリストの心構えを述べたものである。[7]以上のように、今回収集した用例の中には、イディオム、ことわざ、格言など、様々な種類の慣習的な表現形式が、改変なしでそのまま使用されているものが確認された。

4.2 慣習的形式からの拡張

慣習的な表現形式や背景知識が基になっていると考えられる句複合語の中には、慣習的な表現形式の一部に改変がなされているタイプも確認された。このような、慣習的な表現を基にした拡張的表現の具体例は以下の通りである。

(4) It is painfully clear that the financial system will not rebound on its own from the excessive lending and borrowing of the Bush years and the credit collapse in their wake. The **one-bailout-at-a-time** approach hasn't worked. And modest steps are no longer an option.
(5) You used to operate with a **throw-everything-against-the-wall-and-see-what-sticks** approach.
(6) At the same time, scores of families complained that the DHS had adopted **a take-the-child-first-ask-questions-later** approach.

(4) は “one step at a time” (ゆっくりと、慎重に) という慣用表現が基になった拡張的表現である。(4) が収録されていた文章では経済が話題となっており、強調部分では本来の “step” が “bailout” に置き換えられ、“the one-bailout-at-a-time approach” で「ゆっくりと

[4] OED, s.v. *way* を参照した。
[5] OED, s.v. *take* を参照した。
[6] Collins Online English Dictionary (https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english) を参照した。
[7] 英語版 Wikipedia (https://en.wikipedia.org/wiki/Source_(journalism)) を参照した。

一つ一つの企業に経済緊急援助を行っていくやり方」という意味が表されている。ここで、“one step at a time” の持っている「ゆっくりと」、「慎重に」という意味が、それを基にした拡張的表現である “the one-bailout-at-a-time approach” に受け継がれている点は注目に値する。意味の継承が行われている証拠に、(4) の最後の文では「もはや控えめな措置 (modest steps) は選択肢に入らない」と述べられており、書き手が “the one-bailout-at-a-time approach” を控えめな、ゆっくりとした慎重な措置であると考えていることが読み取れる。今回の調査で “one-X-at-a-time approach” という表現は他にも見つかり、X の部分には文脈に応じて “day”、“factor”、“game”、“guard”、“hole”、“issue”、“meal” など様々な語が生起していた。

(5) の強調部分は “throw enough mud at the wall, some of it will stick” (十分に試行や推量をすれば、そのうちのいくらかは有益あるいは正しい結果をもたらす)、あるいは “throw spaghetti at the wall and see what sticks” (少なくとも何回かは正しい、あるいは有益となることを期待して、たくさんの試みや推量を行う) などの慣用表現が基になっていると考えられる。[8](4) の場合と同様に、拡張の基になっている慣用表現と実際に使用されている表現形式は部分的にしか一致していない。しかし、読み手は基の慣用句と (5) の表現との間に “throw”、“the wall”、“stick” などの語の共通性や、“throw ... the wall and see ...” という構造の共通性などを見出し、それらを手掛かりに基の慣用表現を突き止め、その意味を参考に (5) の解釈を行うことができると考えられる。

(6) はアメリカ合衆国国土安全保障省 (DHS) の児童虐待への対応について書かれた文章からの抜粋であり、強調部分は “shoot first, ask questions later” (脅威とみなした人間、あるいは殺すことが正当化されると感じた人間を、そうすることが正しいという確信を持てる前に殺すこと。転じて、何か決定的なよくないことを、そうすることの正しさ、正当性、あるいは必要性が分かる前に実行する) という慣習的な表現が基になった拡張的表現である。[9]この用例では、本来 “shoot” である部分が “take the child” で置き換えられており、DHS の児童虐待の危険がある家庭への対応が「虐待の裏付けが無いまま児童を保護する」ものであり、そのやり方に対していくつもの家族が不満を露わにしていたということが述べられている。

以上のように、今回の調査では、慣習的な表現形式に部分的な改変がなされた句複合語の用例が確認された。これらの表現の解釈に際しては、読み手は実際の表現と基の表現との間に形式の共通性を見出し、基の表現を突き止め、基の表現の意味と改変により挿入された語句の意味の両方を考慮に入れることで、書き手が意図した意味に到達すると考えられる。

4.3 慣習的な背景知識の使用

慣習的な表現形式や背景知識が基になっていると考えられる句複合語の中には、基となっている慣習的な表現形式は存在しないが、表現の背後に基になっている慣習的な背景

[8] これらの慣用表現の意味は The Free Dictionary (https://www.thefreedictionary.com/) を参考にした。

[9] この慣用表現の意味は The Free Dictionary (https://www.thefreedictionary.com/) を参考にした。

知識が存在すると考えられるタイプが確認された。このような、慣習的な背景知識が基になっている句複合語の具体例は以下の通りである。

(7) We feel the comprehensive nature of the CISPA legislation offers a **bazooka-to-swat-a-horsefly** approach, and bazookas always cause collateral damage.
(8) We bought 27 pumpkins in total and when you have 27 pumkins to carve, it is best to take a **Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence** approach. Carving pumkins until your fingernails erode is fun! That's what I told Géraldine ...

用例 (7) の強調部分は慣習化された表現ではない。実際、Google 検索を行ったところ "bazooka to swat a horsefly" と完全に一致する例は 1 件もヒットしなかった。[10]多少なりとも形式が類似している表現に “kill a fly with sledgehammer/ bazooka/cannon” があるが、(7) の強調部分は「名詞+to 不定詞」であるのに対して、この表現は「動詞句+前置詞句」であるという形式上の差異がある。したがって、(7) の強調部分は、慣習的な表現形式に部分的改変がなされた拡張的表現であるとも考えにくい。

(7) の強調部分は、慣習的な表現形式が基になっているのではなく、慣習的な背景知識が基になっていると考えることができる。(7) の “a bazooka-to-swat-a-horsefly approach” は字義通りに「アブを叩くためにバズーカを使用する」ということを意味するのではない。これは、より一般的に「ある目的を達成するために必要以上の手段に訴える」という意味を表している。(7) の句複合語の解釈に際して、読み手はその表現形式を介して「ある目的を達成するために必要以上の手段に訴える」という慣習的知識に到達し、表現の意味を理解すると考えられる。

また、(7) の強調部分は句をなしていない。それにもかかわらず意味が通じるのは、“bazooka” という道具と “swat a horsefly” という行為が同時に現れることで、読み手が省略されている「使用」の意味を補完して “(use a) bazooka to swat a horsefly” という表現を復元することができ、その背後にある「ある目的を達成するために必要以上の手段に訴える」という慣習的知識に辿り着くことができるためであると考えられる。

(8) はハロウィンの準備について書かれた文章からの抜粋で、(7) と同様に慣習的な背景知識が基になっていると考えられる表現である。強調部分では、Mark Twain 著の有名な物語 *The Adventures Of Tom Sawyer* に言及がなされている。この物語には、主人公のトムが悪戯をした罰として叔母から大きな囲いを漆喰で塗るように命ぜられるシーンがある。[11] 何とかして遊びたいトムは知恵をしぼり、からかってくる友人の前で、それがいかにも楽しく重要で、特別な技能を必要とするめったにできないことであるかのように装う。トムに騙されて漆喰塗りをやりたくなった友人は、トムにお願いをしてやらせてもらう。最終的には少年たちがぞろぞろと集まってみんなで漆喰塗りを行い、トムは心ゆくまで遊ぶことができる。(8) の書き手は、*The Adventures Of Tom Sawyer* のこの場面が、書き手や読み

[10] 2021 年 8 月 3 日時点のことである。

[11] *The Adventures Of Tom Sawyer* のこの場面のあらすじについては、Gen Cruz 氏の記事 (https://medium.com/@thenthgen/the-most-important-life-lesson-from-tom-sawyer-e92f86f6afb3) を参考にした。

手が属する文化圏で慣習的な背景知識となっていることを想定し、“a Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence approach” という表現を、読み手がその背景知識にアクセスするための手がかりとして提示することによって、「一人でやるには大変骨の折れる作業を、あたかも楽しいことであるかのように装うことで、他の人の協力を得て遂行するやり方」という複雑な意味をコンパクトに言い表している。

(8) の強調部分は句をなしていない。“Tom Sawyer” は “whitewash the picket fence” の主語ではなく、この動詞句に付け足されたものと見なすのが適切である。その証拠に、動詞 “whitewash” には三単現の “s” が付いていない。書き手は “whitewash the picket fence” だけでは読み手が背景知識に到達することが困難であると考え、“Tom Sawyer” を付け加えることで、読み手が自身の意図した背景知識に到達することを容易にしようとしたと考えられる。

以上のように、今回の調査では、基となっている慣習的な表現形式は存在しないが、表現の背後に基となっている慣習的な背景知識が存在すると考えられる句複合語が確認された。このような表現においては、非主要部で使用されている語句が、英語圏においてお馴染みとなっている、あるいは少なくとも書き手がお馴染みとなっていると想定している慣習的な背景知識に、読み手が辿り着くための手掛かりとなっている。解釈に際して、読み手はその手掛かりを頼りに、書き手が意図した慣習的な背景知識への到達を試みる。適切に読み手を導くことができれば、この表現方法は「ある物語の登場人物がとった特定の作戦」のような非常に込み入った内容でさえも、通常の表現方法では真似することのできない、非常に少ない語数で表すことが可能である。

5. 考察

主要部名詞が “approach(es)” 以外の名詞の場合にも、非主要部が慣習的な表現形式や背景知識に基づいている例はいくらでも見られる。第 4 節では、慣習的な表現形式または背景知識が基になっている句複合語のうち、主要部名詞が “approach(es)” であるものに限ってケーススタディを行ったが、そこでの分析は主要部名詞が “approach(es)” であることに依存しておらず、それ以外の主要部名詞の場合にも通用するものである。そこで、本節では、第 4 節の結果を踏まえ、より一般的に、主要部名詞の指定を無くした「慣習的な表現形式または背景知識が基になっている英語の句複合語」を、形式と意味・機能の対である構文として定義する。その上で、Hilpert (2019) が述べている構文の認定基準に照らして、そのような句複合語のタイプを構文として定義することが妥当であるということを論ずる。

第 4 節の分析を踏まえると、慣習的な表現形式または背景知識が基になっている句複合語に対して、表 1 のような構文を定義することができる。

まず、構文の形式は「非主要部 + 主要部名詞」であり、非主要部には句が含まれる。ここで、非主要部が句を含んでいれば、全体として句をなしていなくてもよいということに注意が必要である。これは、一般に句複合語の非主要部は句であると定義されながらも、実際には非主要部が句をなしていない表現も句複合語とみなされている場合があることを

考慮に入れた結果である。[12]条件を緩めて、上の定義にあるように、非主要部が「句である」ことではなく「句を含む」ことを句複合語の必要条件とすることで、研究者たちが非主要部の形式に関して厳密に検討することなく「句複合語である」とみなしてきた表現を、定義に基づき正式に句複合語と認めることができるようになる。加えて、(7)、(8) のように非主要部が句をなしていないものも正式に句複合語であるということができる。

表 1: 慣習的な表現形式や背景知識に基づく英語の句複合語構文

形式	・非主要部 + 主要部名詞 ・非主要部には句が含まれる。 ・全体は句ではなく複合語である。 ・非主要部がひとまとまりであることがハイフンや引用符によって明示されることが多い。
意味・機能	・非主要部が、その慣習的な形式、またはそこで使用されている特定の語句を通して、読み手に慣習的な意味や背景知識へのアクセスを促すという機能を持つ。 ・全体の意味は、非主要部を通してアクセスされた「慣習的な意味 (+ 形式の改変に応じた修正)」を通して主要部名詞を特徴付けることで得られる意味である。

形式に関して、もう一つ、「非主要部 + 主要部名詞」が全体として句ではなく複合語となっているという条件がある。句と複合語を判別する方法として、内部への形容詞の挿入を許すかどうかを調べる方法がある。この判別方法では、内部に形容詞の挿入が許される場合は句、許されない場合は複合語であるということになる。第 3 節で説明した句複合語を収集するための検索クエリを、非主要部と “approach(es)” はそのままにした上で、両者の間に形容詞が生起するという条件を付け足して実行してみると、5 件だけがヒットした。[13]非主要部と “approach(es)” の間に何も生起しない用例が 677 件見つかったにもかかわらず、両者の間に形容詞が生起する例が 5 件しか見つからないという事実は、句複合語においては非主要部と主要部名詞の間への形容詞の挿入は容認しがたいということを示唆している。したがって、句複合語は句ではなく、その名の通り、複合語であるということが支持される。

形式に関して、最後に、句複合語とみなされるための必要条件ではないが、多くの用例に共通して見られる特徴を指摘しておく。それは、非主要部が、ハイフンや引用符の使

[12] 例えば Trips (2012, p. 322) は句複合語の非主要部を「複合的な最大句 (complex, maximal phrase)」であるとしているが、同一の論文内で、BNC で発見した句複合語の具体例として “the “if ... then” technique” (Trips, 2012, p. 325) を挙げている。「句である」ということの意味をよほど特殊に定めない限り、この表現の非主要部である、省略の記号を含んだ “if ... then” が句であるということは認めがたいと思われる。それにもかかわらず、この用例が句複合語であるとみなされる背後には、非主要部が慣習的知識を喚起するという判断があるのかもしれない。なお、この例は非主要部に句を含んでいないので、本論文の定義では句複合語とはみなされない。

[13] 例えば “his let-us-sit-down-and-settle-our-differences diplomatic approach” という例が見つかった。

用によって、ひとまとまりであることが明示されているということである。[14]非主要部のまとまりが明示される背景には、読み手への配慮が窺える。非主要部がまとまっていることが示されていない場合、示されている場合と比べて句複合語の存在を認識するのにより多くの時間と労力が必要となる。書き手が、読み手が理解に困難を生じることが少なくなるように配慮した結果、非主要部のまとまり、ひいては句複合語の存在が明示されることが多くなっていると考えられる。

次に、慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語構文の意味・機能について論ずる。はじめに、このような句複合語は「非主要部が、その慣習的な形式、またはそこで使用されている特定の語句を通して、読み手に慣習的な意味や背景知識に辿り着くことを促す」という機能を持っていると考えられる。実際、第 4 節で観察した例を振り返ると、非主要部に慣習的形式がそのまま使用されていたり (e.g. “a take-it-or-leave-it approach”)、非主要部が慣習的形式と部分的に一致していたり (e.g. “a take-the-child-first-ask-questions-later approach”)、非主要部が有名な物語のワンシーンを指す語句を含んでいたり (e.g. “a Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence approach”) することで、背後にある慣習的形式や背景知識に、読み手がアクセスすることができるようになっていた。

句複合語全体の意味は、上記のように非主要部を通じてアクセスされる慣習的形式と結びついた意味、あるいは慣習的な背景知識に、語句の改変がある場合はその分の若干の修正を施して得られる非主要部の意味を通して、主要部名詞を特徴付けることで得られる意味となる。第4節で見たように、慣習的形式がそのまま使用されている場合 (e.g. “a my-way-or-the-highway approach”) はその形式に結びついた意味が、慣習的形式に改変が施されている場合 (e.g. “the one-bailout-at-a-time approach”) は、基の形式と結びついた意味に、改変により加えられた語句の意味を合わせた意味が、慣習的な背景知識に基づいた表現の場合 (e.g. “a bazooka-to-swat-a-horsefly approach”) は、その慣習的な意味が非主要部の意味になり、その非主要部によって主要部名詞を特徴付けて得られる意味が句複合語全体の意味となる。慣習性を利用しているからこそ、複合語というコンパクトな形式をとっているにもかかわらず、本来ならば文章で表さなければ伝えられないような意味 (e.g. “a Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence approach” の意味) さえも表すことができる。

以上のように定義した、慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語構文を、構文として認定することは妥当である。このことを、Hilpert (2019) が提示している構文の認定基準を参照して確認する。彼は構文の認定基準として、以下の 4 つを挙げている。

(i) 表現の形式が標準的な文法パターンから逸脱している。
(ii) 表現が非構成的な意味を持っている。
(iii) 意味や形式に関して特異な制約がある。
(iv) コロケーションに関して選好性がある。

[14] Trips (2012) も述べている通り、句複合語は話し言葉よりも書き言葉でよく現れる。話し言葉で句複合語が現れるときにどのような音声的特徴が観察されるかについては、今後さらなる研究が必要である。

まず、(i) に関してであるが、句複合語は全体として複合語であるにもかかわらず、非主要部に句を含むという点において、標準的な文法パターンから逸脱しているといえる。したがって、今回定義した構文は (i) を満たす。次に、(ii) であるが、今回調査したほとんどの句複合語の意味は、構成要素となっている語句の意味を足し合わせても得ることができない。第 4 節で見たように、今回調査した句複合語はどれも慣習的な形式あるいは背景知識が基になっており、句複合語の非主要部の意味、したがって句複合語全体の意味にはそれらの慣習的な意味が結びついているため、非構成的である。よって、今回定義した構文のほとんどの事例は (ii) を満たす。ただし、中には非主要部が頻度が高いという理由だけで慣習的な表現形式であるとみなされており、非構成的な意味を持っていない例もある。[15]このような例の存在を考慮すると、厳密には (ii) の基準は満たされていないと言える。また、(iii) に関しては、非主要部がハイフンや引用符、あるいは音声的な特徴によってひとまとまりであることが示されているという、形式の特異性が該当する。ただし、これは、ある表現が表 1 の構文の具体例であるとみなされるための必要条件ではなく、実際には非主要部に何も目印が付いていない句複合語も存在する。ゆえに、厳密には (iii) の条件は満たされていない。最後の (iv) に関しては、さらなる調査が必要である。

以上の議論から、今回調査した「慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語」は、Hilpert (2019) が挙げている構文認定基準 4 つのうち、(i) を確かに満たし、(ii)、(iii) をほとんど満たしている。(i) から (iv) の構文認定基準は、どれも、ある表現が構文であるとみなされるための十分条件であるから、4 つのうちどれか 1 つでも満たしている表現は構文の具体例として認めてよい。したがって、今回定義した句複合語のタイプを構文として定義することは妥当である。

6. 結語

本論文では、大規模なウェブコーパスである enTenTen15 から収集した実例の分析を通して、「慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語」を構文として定義し、それを構文とみなすことが妥当であることを主張した。はじめにコーパスから収集した用例を分析した結果、慣習的な表現形式がそのまま使用されている句複合語 (e.g. “a my-way-or-the-highway approach”)、慣習的な表現形式に部分的改変がなされた句複合語 (e.g. “the one-bailout-at-a-time approach”)、慣習的な表現形式ではなく慣習的な背景知識が基になっている句複合語 (e.g. “a Tom-Sawyer-whitewash-the-picket-fence approach”) の 3 種類が確認できた。次に、この分析を基にして、慣習的な表現形式や背景知識に基づく句複合語構文を定義した。この構文の形式は「非主要部 + 主要部名詞」であり、非主要部には句が含まれ、全体は複合語になっている。非主要部はハイフンや引用符によってひとまとまりであることが示されることが多い。この構文の非主要部は、その形式の慣習性や、そこで使用されている語句の力を通して、その背後にある慣習的な意味や背景知識に読み手を導くという機能を持つ。非主要部の意味は、非主要部を通じてアクセスされる、慣習的な形式と結び

[15] このような例に “let-them-off-with-a-warning approach” がある。"let them off with a warning" が非構成的な意味を持っていると言えるかどうかにはやや議論の余地があるが、Google 検索にかけるとおよそ 1260 万件という多数の完全一致が確認できたため、今回の調査では慣習的な表現形式であるとみなした。

ついた意味または慣習的な背景知識そのままとなるが、語句の改変がある場合には、その分の修正を施したものとなる。このような非主要部の意味によって主要部名詞を特徴付けた意味が句複合語全体の意味である。こうして定義された「慣習的な表現形式や背景知識に基づく句複合語構文」は、Hilpert (2019) が挙げている 4 つの構文の認定基準のうち、「標準的な形式からの逸脱」を確かに満たし、「意味の非構成性」と「意味や形式に関する特異な制約」の 2 つもほとんど満たしていると言える。したがって、この種の句複合語を構文として認定することは妥当である。

今回の調査では、「主要部名詞が “approach(es)” であり、慣習的な形式や背景知識に基づいている句複合語」に限定してケーススタディを行なった。そして、その分析結果を基に、主要部名詞の指定がない「慣習的な形式や背景知識に基づく句複合語構文」を定義した。今後は “approach(es)” 以外の名詞を主要部とする句複合語についてもケーススタディを行い、本論文で定義したこの構文の形式や意味・機能が、それらの句複合語の分析結果と整合性の取れるものであるかどうかを検討していく必要がある。また、慣習的な形式や背景知識が基になっていない句複合語についても、どのように構文を定義することができるのか、また、そもそもそのような句複合語の全てを一括りにするような構文の定義が可能であるのかということも含めて、考察していく必要がある。

参考文献

Bauer, L., Lieber, R., & Plag, I. (2013). *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford University Press.

Hein, K. (2017). Modeling the properties of German phrasal compounds within a usage-based constructional approach. In C. Trips & J. Kornfilt (Eds.), *Further investigations into the nature of phrasal compounding* (pp. 119–148). Language Science Press. https://doi.org/10.5281/zenodo.885123

Hilpert, M. (2019). *Construction Grammar and its application to English* (2nd ed.). Edinburgh University Press.

Meibauer, J. (2007). How marginal are phrasal compounds? Generalized insertion, expressivity, and I/Q-interaction. *Morphology*, *17*(2), pp. 233–259.

Meibauer, J. (2015). On “R” in phrasal compounds – a contextualist approach. *STUF – Language Typology and Universals*, *68*(3), pp. 241–261.https://doi.org/10.1515/stuf-2015-0013

Pafel, J. (2015). Phrasal compounds are compatible with Lexical Integrity. *STUF – Language Typology and Universals*, *68*(3), pp. 263–280. https://doi.org/10.1515/stuf-2015-0013

Shimamura, R. (1986). Lexicalization of syntactic phrases. *English Linguistics*, *3*, pp. 20–37. https://doi.org/10.9793/elsj1984.3.20

島村礼子 (2005).「句の語彙化について—英語の名詞前位修飾表現を中心に—」『現代形態論の潮流』pp. 55–73. くろしお出版.

Trips, C. (2012). Empirical and theoretical aspects of phrasal compounds: Against the “syntax explains it all” attitude. *Proceedings of the Mediterranean Morphology Meetings*, *8*, pp. 322–346.

Wiese, R. (1996). Phrasal compounds and the theory of word syntax. *Linguistic Inquiry*, *27*(1), pp. 183–193.